

---

# ゴッドイーター（勝手に）番外編

数え唄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴッドイーター（勝手に）番外編

### 【Nコード】

N44120

### 【作者名】

数え唄

### 【あらすじ】

これは、極東支部の愛すべき仲間達が織り成す愉快な物語である。本編クライマックスのほんの少し前の話をでっちあげ！

## ターゲット1〜シンドウの場合（前書き）

何となく書いてみました。シリアスなところはありません。  
主人公キャラはウチの子です。キャラメイクの初期設定の容姿です。

## ターゲット1 シンドウの場合

現在時刻AM4:00

フェンリル極東支部・通称は、アナグラ時間帯もあって、いまだ寝静まっていた。

もちろん、支部とはいえ『人類最後の砦』を謳う組織であるので、最低限の人員は活動が続けている。しかし、そうは言っても起きているのは、熱中すると寝食を忘れる人種である技術屋や非常時のための不寝番かなめくらいなもので、守りの要であるゴッドイーター達は夢の中である。

アラガミによる捕食から人類を守るため、人間を超越した肉体を手にしたゴッドイーターといえど、毎日の食事や睡眠は不可欠なのである。

それは柏木かしわぎシンドウにも言えることだった。

世界に数人しかない《新型神機》に適合し、まだ10代の身でありながら最前線でアラガミと闘う第一部隊の隊長を務める少年で、その実力はすでに前隊長に比肩すると囁かれている。

しかし、ベットの上的このだらけた寝顔を見れば、噂した者達は残らず口を閉ざしてしまうことだろう。

「……でへへ……」

今日はよほど夢見が良いらしく、いつも率先して戦場を駆ける凛々しさは欠片も見取れず、愛嬌があると言えば聞こえは良いが、はっきり言うとマヌケ面を晒している。

そして、そんな彼の隙を突くように。

照明が落ちた部屋に一瞬だけ、廊下からそっと光が差し込んだかと思うと、細く開いたドアから二つの影が滑り込んで来た。

ドアが閉じられ再び暗闇に沈んだ室内に佇むそれらは、話し声とも物音ともつかない微かな音を立てる。

「うう…ん…」

そして、シンドウが微かな呻き声を漏らして寝返りを打った時、

「ふん！」

「ぶわふ!!?」

熟睡するシンドウの顔面に柔らかい物が叩きつけられた。

当然、一気に目が覚めた。

「うわあ!?! な、何っ?」

バツと跳ね起きて、混乱する頭で慌てふためくシンドウの傍で聞き慣れた笑い声がしたかと思うと、パツと明かりがついて彼の目を眩ませる。

「うっ！」

思わず腕で顔を庇う。

目が慣れてきたところで恐る恐る腕をどけると、そこには見慣れた顔があった。

「コ…コウタ……?」

「おう！オハヨ」

片手を上げて挨拶する同期の少年・藤木コウタを前に茫然とすること数秒。しかし、すぐに彼が手に持った枕に気づく。

「いきなり何すんの！」

つい怒鳴ってしまったが、こんな時間にこんな起こし方をされて怒らない方がおかしいだろう。

「てか、どうやって侵入<sup>はい</sup>った？！ドアが開く音はしなかったぞ！？」

いくら寝ていたとはいえ、現役ゴッドイーターである自分が聞き逃すはずはないのに。

しかし、コウタは「まあまあ」とこちらを手で押し止め、続いて徐<sup>おもむろ</sup>に、足に立て掛けていた物を取り上げた。

「？」

怪訝な顔でそれを見上げると、角材に赤く塗ったベニヤ板を打ち付けた物があり、そこにはこう書かれていた。

【ドッキリ！（bへー。）★】

……顔文字を使ってある辺りが果てしなくムカつく。が、それより気になるのが……

「ド、ドッキリ？」

なんと言っているか分からず、戸惑いのまま呟くと、板張りを掲

げるコウタが仰々しく頷いた。

「カメラもあるよ。ほら」

言われてそちらを見たシンドウは、そこにいた人物に眉根を寄せた。それは不快さからでなく、ここにその人物がいる違和感からだった。

「……ソーマ？」

「……………」

ソーマ・シックザールはいつもより無然とした顔で肩に担いだカメラを回している。立ち位置からして、部屋の照明を入れたのは彼だろう。いや、それよりなにより……

「え？何？ソーマもグルになってんの？」

だとしたら喜ばしいことだ。

以前は人付き合いを拒否してばかりだった彼は、シオが来た頃からどこか雰囲気が柔らかくなってきたように思っていたが、例の『シオ洋服脱走事件』↑（コウタ命名）後、それがハッキリと表れてきた気がするのだ。

これがその結果だとしたらあまり強く出るわけにもいかない……打ち解けた結果が、どうして夜襲になるのか甚だ疑問だが。  
はなは

思いもよらない状況に頭を悩ませているシンドウをおいて、コウタがソーマを振り返り言った。

「はいオッケー！カメラ止めていいよ」

「……………」

素直に従ったところを見ると、やはりというか、嫌々やっていたらしい。

「いやーいい画撮れたよ。ありがとな」

こちらに向き直ったコウタはご機嫌な顔で肩を叩いてくる。

「……ええと……」

この時点でシンドウは自力の状況把握を諦めていた。溜息とともに首謀者とおぼしきコウタに問いかける。

「とりあえず、どうしてこんなことしたのか教えてよ」



「『爆笑寝起きドッキリ』?」

支給品のコーヒーを挟んで対面のソファに腰掛けた二人の話を聞いていたシンドウは、コウタが切り出した一言を復唱して思い出す。

「それって確か、コウタがこないだ持ってきた映像データだよね?」

ほんの三日前のことだが、サカキ博士の部屋から外に出ることができないシオの退屈しのぎにと彼が持ってきたのを、皆で鑑賞したのを覚えている。内容は十数年前にやっていたバラエティー番組で、



タレントが奇抜な方法で寝ている人を起こしていくというものだった。

「そうそう」

「ソーマを笑わせた驚異の代物の？」

「いぐざくとりー」

「……………待て。それはシオが適当に言ったことだろうが」

それまで黙ってまづいコーヒーを啜っていたソーマの反論に、シンドウとコウタはどうだかなあという顔でニヤリと笑う。

「シオは中身が幼いから嘘つけないだろうし」

「それにあの子、ヒマさえあればソーマばっか見てるよ？」

「…………ちっ。言ってる」

そう吐き捨てて再びコーヒーを啜るソーマを横目に、シンドウはコウタに向き直る。

「まあ一応状況は分かったよ。つまりはあの番組を真似てみたわけだ」

「まあね」

嬉しそうなコウタに軽く呆れ返りながら続ける。

「けど、単なる悪戯じゃないよね。それならカメラはいらないだろうし」

「お。さすがリーダー。察しが早くて助かるよ」

同意とともにコーヒーを啜り、味の酷さに辟易した表情かおをしてからコウタは語り出した。

「最近の《アナグラ》さあ、何かいろいろ慌ただしいじゃん？だからここいらで何か面白いことでもやって、皆の疲れを吹き飛ばそうって話になって…」

「……話について、ソーマと？」

「何で俺がそんなことをこいつと話すんだ。サカキの野郎とだ」

「あっ、なるほどね」

言われてみると彼らしい提案だ。普段何かと接することが多い（ここ最近は特に）人だが、未だに計りしれないところがある。

ただ、今回のような配慮を見ると悪い人物ではないようだが、それでも何となく気を許し切れない所がある人だ。

「博士もドッキリ好きみたいでさ。カメラ用意したり、部屋のドア開けても音がでないよう細工してくれたりとか、いろいろ協力してくれてんだ」

「……どうりで入って来る音がしなかったわけだ…」

苦もなく脳裏に浮かべられる、悪戯小僧のような顔で喜々として細工に勤しむ彼の姿を見て、もう一度溜め息。あの人は確かにこういうことが好きそうだ。

「……でもまあ、いいんじゃないかな。なかなか楽しそうではあるし」

「だろ？撮り終えたら《アナグラ》の皆で観ようって思ってるんだ。もう告知済みだし」

「告知？もしかしてエントランスに張ってあるあれ？」

あれ（、）とはエントランスの隅っこにこっそりと張ってあるポスターのことだ。そこにはただ面白いものが見られるという文句

と、集合日時だけが印刷された味気ない物で、正直シンドウも言われるまで忘れていた。今になって、ポスターが張られたのは映像データーを観た翌日だったことを思い出す。

ポスターだけ見ると期待薄だったが、これは案外期待できる試みではなかろうか。

「そうそれ……とっ、ノンビリし過ぎたな。そろそろ行くか」

そう告げて、コウタとソーマはそれぞれの荷物を持って腰を上げた。突然やって来てたたき起こされた時は腹も立ったが、こんな良い話が聞けたのだから儲け物か。

そんな良い気分で、このまま部屋をあとにするだろう二人に笑顔でエールを送る。

「ああ。完成が楽しみだよ。頑張ってたな」

すると、コウタもニツコリ笑って、

「何言ってるの。アンタも行くんだよ」

月並みな台詞だが、最初、何を言われたのか分からなかった。聞き違いかと思ったくらいだ。

「……………は？」

「だから、アンタも来るんだよ。一緒に」

どうやら聞き違いではないようだ。となれば、当然の疑問が残る。

「え？え？何で僕が？」

対するコウタは呆れ顔で言ってくる。

「だって、ネタ元のデータでも起こされた人は参加してたじゃん」  
「ああ…そういえば…」

確かにそんな展開だった。そして、彼等にはすべからく拒否権はないのだ。これも多分、その類たぐいなのだろう。

「分かったよ」

何度目かになる溜め息について企画に同意したシンドウは、そこでふと思いついて尋ねる。

「…もしかしてソーマもその口？」

「……あ？」

「そんな怖い顔しないでくれよ…。いや、寝てるところ起こされて引っ張り込まれたのかなって」

「…まあな…」

「コウタスゲー！！よくソーマに寝起きドッキリなんてできたな。尊敬するよマジで」

「バカ！んなわきゃねーだろ。そんなことしたらボコボコにされてるって。フツーに起こして協力してもらってんの。それよか早く着替えろよ。時間押してんだから」

急かしてくるコウタに気のない返事を返したシンドウには、先程から気になって仕方がないことがあった。

「ねえコウタ」

「何？時間ないんだから早くしてくれよ」

「最後に一つだけ。それは？」

シンドウの視線の先にはコウタの胸元に下がるペンダントがあった。それ自体は別にいいのだが、

「それ女物でしょ？」

「え、あつ、これ？これはその……」

急に慌て出すコウタに首を傾げて問う。

「妹さんからのプレゼント？」

「！ああうんそうなんだ！女物だけどせっかくだからさあ。それよりほら、早く着替えろってば！」

まずい話題にでも触れられようにちよつと慌てた感じのコウタを少し怪訝に思うが、とりあえずいつもの格好に着替えていく。

「ところで、次は誰の所に行くの？」

最後にフェンリルの紋章が入った緑のジャケットに袖を通しながら問うと、コウタはよくぞ聞いてくれたと言わんばかりのニンマリ顔になる。

「気になる？やっぱ」

「んゝそりゃね。で？誰？」

そう言つてシンドウがコウタを見やると、我等が偵察曹長は今にも笑い出しそうな顔でVサインを突き出し、ターゲットの名を告げた。

「ア・リ・サ☆」

## ターゲット1〜シンドウの場合（後書き）

いかがでしたか？面白いと感じていただければ幸いです。

## ターゲット2〜アリサの場合（前書き）

何だからしくないノリで書いてしまった。どうしてこんなことに…  
…。



## ターゲット2 アリサの場合

「……なんだって？」

シンドウが半ば呆気に取られた表情で聞き返すと、コウタはVサインを崩さず笑顔のまま繰り返す。

「だから、次はアリサのトコに行くんだよ！」

シンドウは彼の言葉を頭の中でよく反芻し、噛み砕いてみてから深々と溜め息を吐く。

「どうやらまた聞き違いではないようだ。」

「……一応聞いとくけどさ。それ、アリサに許可取ったの？」

「うんにゃ。アポなしに決まってんじゃない」

「……だよな」

企画の主旨を思えば当然だろう。仮にそんな連絡があったら、シンドウはドアをバリケードで塞いで今も寝ていられたはずだ。

しかし、それがなくてもこの少年の性格を思うと、結局アポなしだったことは間違いない。

「だーいじょーぶだって！撮影だって言えば許してくれるよ」

それはさておき。

シンドウはさっさと部屋を出ようと踵を返したコウタの後ろ襟をむんずと掴んで言う。

「大丈夫なわけないだろ！こんな時間に男が大勢で女の子の部屋に侵入<sup>はい</sup>れるか！！」

しかも寝起きドッキリとはいえ、目的は女の子の寝込みを襲うことである。

「ええ〜…」

「ええ〜じゃない。ましてアリサだよ？あの娘の部屋になんて忍び込んだらなにされるか……」

元ネタでも女性に仕掛けていたが、あれはそういう番組だとすぐに理解されるから許されるのであって、自分達がいきなりやったりしたら……下手しなくとも捕まる。

最悪、その場で本人に処刑されるかもしれない。限りなく残忍に。キレた女は恐いのだ。

「（アンタがいれば大丈夫だと思うけど……）」

そんな地獄の未来に震えていたシンドウは、コウタの意味深な呟きを聞き逃していた。

「とにかく、いくらなんでもこれはまずいから。隊長として見逃すわけにはいかないな」

「じゃあどうすんの？このままじゃ企画がパアなんだけど！」  
「む」

完成を望む身としては確かに困る。が、強行するのはもつとまずい。

せめて女性がいれば話は変わるのだが……

「そうだ！サクヤさんに来てもらえば…」

「あ、駄目駄目。サクヤさんもバッチリターゲットだから。それにそうじゃなくなたって、こんな時間に起こせないっしょ」

「う…」

このお馬鹿企画の立案者でありながら、意外にまともなことを言うコウタに二の句が継げなくなる。

その隙を突いてこちらの手から逃れたコウタは、何を思ったのかシンドウの首をガッチリロックする。

「ちょ、コウタ！？」

「なあ。もう立場とかそんなん気にしないでさ、ぶっちゃけた話しようよ」

コウタは常にない真剣な声音でシンドウに語りかける。

「話すことなんて——」

「見たくない？男として」

「……………」

何故か、言葉が出なくなった。

しかも身体までもが意思を無視して彼の言葉に耳を貸そうとかのように、コウタの腕から逃れようとする動きも少し鈍くなる。

それを見逃すコウタではない。畳み掛けるように続ける。

「いいのかなあ？見なくて。アリスの寝顔……絶対可愛いぜ？」

ぴくっ、とシンドウの肩が震える。

「アイツ、寝る時何着てんだろうな？」

ぴくぴくっ、とまた震える。

「想像してみろって。例えばさ、可愛いイラストがプリントしてあるパジャマとか…」

「うう…」

微かに呻くシンドウ。脳裏にはコウタの言うアリサのパジャマ姿（しかもぶかぶかなパジャマである。超キュート）が精密にイメージされている。

「もしかしたらネグリジェかもよ？……スケスケだったりしてな」「な、なんと…！」

一瞬でバッチリイメージされているアリサ（ネグリジェVer.）。シースルーのそれは、常夜灯の淡い光の中で彼女の年不相応に發育した胸や腰回り、スラリと伸びた瑞々しい肢体をこちらの目に焼き付けてくる。破壊力が半端ない。

（いかん。あ、足にきた）

ガクガク笑う膝を見てあと一押しだと悟ったらしく、コウタは言った。

「それか下着だけなのかも。いや、それどころか何も着けてない………とか？」

「ぐはっ!？」

胸をえぐる一言に、ついにシンドウは崩れ落ちた。脳内のアリサ

はすでに一糸纏わぬ身を清潔な白いシートで胸元を隠しただけの格好で、それが余計に豊かな胸を強調する形になっている。こちらを見つめる潤んだ瞳。闇に際立つ白い頬にはほんのりと朱がさし  
て――

「……」

四つん這いで鼻を押さえるシンドウの肩を、何やら悟った顔のコウタがポンと叩く。

「見たくない？」

「……………見たい……………!!」

真っ赤な顔で唸るように言うシンドウ。

自分がやろうとしていることが間違っていることは分かっている。隊を率いる者として、部下にあたる彼女に申し訳ないと思う。

だが、胸を熱くする青春の輝きの前では、多少の罪悪感など無きに等しい。

シンドウとて若さを持て余す年頃の男の子である。同年代の、しかもあんな美少女のあられもない姿が見られると言われれば、揺らいでしまうのは仕方ないことなのだ。

そう考えると、悪いのはシンドウと同じ年なのにあんなせくしいに育った彼女であって、それを見たいと思わされてしまった自分はむしろ被害者ではないか。責められる謂れはない。

有り得ない論理で自分を納得させるシンドウ。男の性<sup>さが</sup>は、こうも容易に良識を消し飛ばしてしまうらしい。

「……………話は決まったか？なら行くぞ」

溜め息混じりに出口に向かうソーマを指差し、コウタはシンドウを慰めるように言った。

「見ろよシンドウ。ソーマなんて見る気満々じゃんか。恥ずかしがることないって!」

「退けシンドウ。その馬鹿の頭、この場で蹴り碎いてやる」

しばらく、激しい物音と悲鳴がシンドウの部屋から途絶えなかった。



音もなくスライドしたドアの向こうは、やはりまだ暗かった。

三人が侵入すると同時に扉が閉まり、外からの光源を遮断する。

しかし、部屋の一角に灯る常夜灯のお陰で足元は心強い。

暗がりにはひそんで息を殺し、ターゲットの微かな寝息を聞き取ると、三人は頷き合って準備を始める。

コウタは持参していた小道具入れから取り出した水鉄砲を構え、シンドウは押し付けられたベニヤ板の『あれ』を握り、ソーマは担いだカメラで二人を映せる位置に移動する。

「(はいどーもお待たせしました!俺達は今、『ロシアが産んだ生粋のツンデレ娘』ことアリサ・イリーニチナア・アミエーラ(15)の部屋に来ています。いつもはつんけんしている生意気娘は、果してどんな寝顔をしてるのか、非常に楽しみです。恥ずかしい恰好なら弱みになる:ゲフンゲフン!もとい盛り上がるので期待したいところですよ)」

……この映像はあとでアリサ本人も見るのはなかったか。上映当日はいろんな意味で血の海の予感がする。

カメラに向かってマイクを握るジェスチャーをして長々と言ったコウタは、不意にエアマイクをシンドウに差し出してきた。ぼーっと突っ立っていたシンドウが困惑していると、

「(新しく入った人、なんか一言)」

「(ええっ!? いきなり言われてもな…。ええと……)」

「(おいシンドウ! さっきの鼻血がまだついてる!)」

「(えっ!? 嘘!?)」

「(ウツソーン)」

「(……!!!!)」

「(イテッ! コラやめろ! 騒ぐと気づかれイデデデ!)」

「(さっさとしろ)」

イラつくソーマを前に取っ組み合いを続けられず、コウタとシンドウは仕事を始める。

といっても、シンドウはカメラの邪魔にならない、かつすぐにアリサの目につく位置に立つだけなので、あとはベッドに近づいて行くコウタを見守るだけだ。

そのコウタは偵察兵曹長の実力を遺憾無く発揮して、音もなく接近していく。

「(にししし。日頃の恨みだ。思い知らせてやる)」

あくどい顔で可憐な美少女に近づくあの少年を、自分は今すぐ殴り倒すべきではないだろうか。どうも逆恨みの臭いがするのだが。

(小さい…小さいよコウタ)

額に手を当てて呆れ返りつつ、ちらっとアリサの様子も見てみる。布団に包くまっていたいて残念ながら何を着ているのかは分からない。しかし、常夜灯のほのかな光に包まれ何も知らず眠るアリサは、溜め息がでるほど美しかった。

いつもつんけんした無表情からは力が抜けて、どことなく幼い寝顔は微笑んでいるように見える。

(……………)

再び胸に去来するこの罪悪感はどうすればいいのか。やはり今からでもコウタを殴り倒すべきか？

そんなことを考えながらふと目を床に向けた時、シンドウは我が目を疑った。声が出なかったのは奇跡だ。

彼の視線の先にあったのは、アリサ愛用のミューティアである。むろんそんなことで彼が動揺するはずはない。

彼を慌てさせたのは、服の上に畳んで置いてある三角形の布切れだった。

(なななななんで……………?!)

あっておかしいわけではないのだから、ある程度大人ならこれくらいで取り乱したりはしないだろう。が、いかんせん女性免疫の低い少年には刺激が強すぎた。すぐさま視線を外して、それからふと疑問に思う。

(…………あれ？でも何で畳んで(、、)あるんだ?)



普通、脱いだ物は畳んだりしないだろう。だとしたらクリーニングから返ったばかりなのだろうか。けれど、それならそれでちゃんと仕舞うものではないか？

(……え？嘘、まさか！)

消去法で浮かび上がった可能性にシンドウは青ざめる。

目の前のこれは、これから着るために用意しているのではないか？

そうすると、アリサが包まる布団の下は……

「!?!?!」

咄嗟にシンドウはコウタを止めようとする。

だが時すでに遅く、コウタはそんな妖精のような少女の傍らに立って片手で水鉄砲を構え、こちらを見て悪戯っぽく笑い、立てた三本の指を折っていく。

――――3

――――2

――――1

「ちょー!!」

ブシャアアアアア!! (水鉄砲発射!)

「ひゃわわっ!!?!」

素っ頓狂な可愛い悲鳴を上げてアリサが目を覚まし、同時に照明

が点いて周囲がはつきりする。

「ああ…」

お蔵入り決定かと、シンドウは思わず目を閉じようとして——止めた。別にやらしい気持ちからではない。その必要がなかったからだ。

顔をぐっしり濡らしたアリサは上体を起こし、上掛け布団を盾代わりに握って壁を背に座り込んでいた。

パジャマを着て。

それは、萌えもエロもない普通のパジャマだった。

「……………」

良かったはずなのに、それを素直に喜べない自分がある。

「おっしゃ！ドッキリ大成功！！」

そんなコウタの大声にビクッと肩を震わせ、ポカンとしていたアリサが彼を見る。

「へ？」

「アリサ！あれあれ」

「は？」

アリサは指し示された方を——シンドウを——特に掲げられている『ドッキリ』の文字を見て、

「はえ……ドッ……え……？」

目をぱちくりさせる様子がとても愛らしい。

それからふと気づいたのか、シンドウの背後に目をやって、またぱちくり。何故彼が、という顔だ。その気持ちはよく分かる。この場合、ソーマの存在がさらに状況を混沌とさせるのだ。

「ええ……と……」

必死に状況把握に努めるアリサは最後に再びコウタを見る。そして彼の手の中の水鉄砲に気づく。

そこでようやく、彼女もネタ元に思い当たったようで、瞳の奥で理解の光が灯る。

「……………そーゆーことですか……………」

はしゃいだ調子でカメラの前でガッツポーズを取りまくるコウタをよそに、俯いて震えるアリサが底冷えする低い声で呟く。シーツを掴む拳が震えているのは多分、笑っているからではない。

「ア、アリサ？」

おそろおそろシンドウが声をかけたのが刺激になったらしい。ブツン、という擬音が聞こえた気がした。

「最っ低です！ドン引きです！なんて馬鹿なことしてるんですか、貴方達は！？」

少女は真っ赤な顔でコウタに詰め寄り怒鳴り散らす。ウゝァジュ

ラもかくやという剣幕にコウタが声を震わせて言った。

「な、なに？ そんな怒んないでよ」

「ふざけないでください！ こんな時間にこんな子供みたいな悪戯されれば誰だって怒ります！ 大体、寝ている女の子の部屋に無断で入るなんてどういう神経してるんですか？ それも男の人ばかり。分かってます？ 貴方達は今、然るべき所に突き出されても文句は言えないんですよ？」

マジな目で語るアリサに、さすがのコウタもゾツとした表情になる。ようやく事の深刻さを知ったらしい。

（…て、このままじゃこっちもまずいか）

暢気に構えてはいられないので、説得に手を貸そうとシンドウも二人に歩み寄る。それに気づいたコウタが助かったとばかりにほっとした顔になる。そして彼は、予想もしない行動に出た。

「アリ…」

シンドウが口を開いた瞬間、

「頼んだシンドウ！」

あろうことか、コウタはシンドウを自分の前に盾のように引き出したのである。

「な…！？」

唐突な行動になすすべもなく、シンドウはマジギレ氷の女王の前

に引き出され、睨みつけてくる潤んだ瞳に晒される。

「……シンドウ……」

「ア、アリサ……ち、違うんだ。聞いて。これは……」

何が違うのか分からないが、そういうしかない。これではまるで、浮気現場を彼女に押さえられた男のようだ。当事者でなければ、今ごろ爆笑中だろう。

「……いいでしょう。本来止める立場の貴方が何故加担しているのか、納得のいくご説明を願いますようか？」

話を聞いてくれるだけの冷静さが残っていたのは喜ばしいが、説明もなにも、こっちはそんな都合の良いものを持ち合わせてはいないのだ。

「いや、その……」

「何ですか？」

若干低い位置からギロリと睨み上げてくるアリサに思わずたじろぐ。だがそれは怯えからではない。

（うわっ。やっぱしカワイイ！）

彼女ほどの美少女と間近で見つめ合っているのだ。そんな場合ではないのだが、やはりどぎまぎしてしまう自分に呆れる。

「あの……」

「もう、何なんですか。はっきりしてください！」

アリサがズイツとさらに顔を寄せてきて、ほのかなシャンプーの甘い香りが鼻腔をくすぐる。身の内から突き上げる衝動で、今に思考が焼き切れそうだ。

後ろの方でコウタがエールを送っているのが分かり、元はといえば誰のせいなのかと問い詰めたいところだったが、目の前の瞳がそれを許してくれそうにない。

「どうして黙ってるんですか？」

「あう、あう……」

険を含んだとどめの問いに、もう何だかよく分からなくなって、つい無意識にそれを口にしていた。

「………アリサ………が………た………から………」

「は？よく聞こえませんが。私が、何？」

怪訝そうに言われ、もう一度、今度ははっきりと言う。

「………！アリサのパジャマ姿が見たかったからです………！」

「………」

シンドウは今まで生きてきて、人がここまでポカーンとした顔になるのを見たことがなかった。目も口も真ん丸にして、アリサはこれ以上なく呆氣に取られている。

「やっちゃったよ………」

コウタの呟きが聞こえる。頭でも抱えていそうな声だった。シンドウも同感だ。自分は何を言っているのだろうか。

「な、な、な……」

見る見る真っ赤になっていく白い美貌を眺めていると心底そう思えた。

「あ、貴方は何を言って……」

「いいいやそのなんというか……」

往生際悪く取り繕おうとするが、何をどうしていいものか分からない。そしてそれは相手も同じらしい。

「「……………」」

最後にはお互い何も言えなくなり、赤い顔で俯いく。

しかしやがて、

「……………どうでしたか？」

そんなふうにはアリサが口火を切った。

「え？」

「だから、感想っ！」

間拔けな声を返すこちらに苛立ったのか、アリサが掴みかからんばかりの勢いで言う。火が点いたみたいに赤い顔で。けれど、怒っているのとはどうも違う。

しかし、びっくりするシンドウを見て落ち着いたらしく、軽く咳ばらいして再度聞いてくる。

「……見たかったのでしょうか？……いかがですか？」

「あ…ああ…」

一転弱々しく尋ねるアリサを上から下まで通し見て、シンドウは言葉に慣れていないかのようにたどたどしい口調で告げる。

「可愛い…です。想像してたより」

嘘は言っていない。デフォルメされた猫がプリントしてある赤いパジャマ姿は本当に愛らしい。艶っぽいところを想像したことが申し訳なくなるくらいに清廉だった。

「そ、そうですか。こんなもので良ければ、その、いつでも見せてあげますよ」

そう言ってアリサは後ろで手を組み、軽く胸を反らせる。

もつとよく見せてくれようとしているようだが、シンドウにはむしろ余計なお世話だった。

何故なら、パジャマの布地を急角度で押し上げる膨らみに目を奪われそうになるのに堪えるため、とんでもなく精神力を要したからである。

（ぐああああなにこのエロさ！普通のパジャマとか関係ない。胸のせいで何もかもエロくなるよ！何これホントに15かこの娘？）

しかし、何はともあれ、何だか嬉しそうにしているとところをみると、機嫌は直ったらしい。ほっと胸を撫で下ろしたシンドウは、

「えっ？今のラブコメ撮っちゃたの？いや、別にいいけど…」



「「よくない!!」」

アリスと二人で真っ赤になって叫んだ。

## ターゲット2〜アリサの場合（後書き）

ギャグって難しいですね。感想・御意見なんでも気軽にどうぞ。

## ターゲット3 シオの場合（前書き）

前書き後書き考えて書くの、結構大変ですね……。。

## ターゲット3 シオの場合

「—————そういうことなら仕方ありませんね」

ソファに腰を落ち着けて企画についてあらかた説明すると、アリスはあっさり同意してくれた。

ちなみに、今の彼女はパジャマの上に淡い紫のカーディガンを羽織っただけの格好である。女の子の寝間着姿は、どうしてこうも胸をときめかせるのか。世界中の科学者はオラクル細胞よりも先に、こちらの謎を説き明かすべきだ。

「いいの?」

意外な答えにシンドウが問うと、アリスは不機嫌そうに目を眇めて言う。

「いいわけありません。寝起きの顔を人前に晒すんですから。単に我慢するだけです」

そうは言うものの、頷くアリスに無理をした様子はない。

無表情で分かりにくいのが、内心面白がっているのかもしれない。

「そうと決まれば次だね」

パチンと指を鳴らしてコウタが促す。

「……貴方はもっとすまなそうにしたらどうなんです?」

じろりと睨まれてたじたじになるコウタに、「ふう……」と溜め息

をついてアリサは言った。

「それでは着替えますから出てって下さい」

そんなふうに言われては出ていくほかない。

荷物を持って先に出たソーマとコウタの後を追いかけてしようとしたシンドウは、そこでふと思い直してアリサの方に向き直り手招きする。

「何なんですか？」

不愉快そうに耳を寄せる彼女に、シンドウはいろんな意味を込めてこっそりと唾を飲んで囁く。

「……部屋は片付けといた方がいいぞ。その……見ちゃいけない物まで見ちゃうから」

「はあ？」

めちゃくちゃお節介そうにこちらを見た後、アリサはキヨロキヨロ周りを見て、さっきシンドウがいた辺りを見た。

「……!？」

途端に真っ赤になるお年頃少女A。

この直後、シンドウが部屋から蹴り出されたの言うまでもない。



指示を受け、アリサの部屋の前で待つこと30分。

「お待たせしました」

いつもの格好で帽子を被りながら現れたアリサに、すぐさまコウタが文句をつける。

「遅いよ！なんでこんなかかんのか？急いでるつつたじゃん」

「それでも急いだんですよ？いつもはもっとかかるんですから」

うっとうしそうに自分を見るアリサに、さらに何か言おうとするコウタを慌てて押し止める。

「時間ないんだろ？早く行こうよ」

「…………ちえっ」

不満そうにしながらも歩き出すコウタの後ろについて歩くシンドウの隣に、流れるような自然な動きでアリサが並ぶ。

彼女は言った。

「さっきのことは黙っていてくださいね。…………貴方とは、良い関係でいたいですから」

俯いていて表情は読めないが、やばいのは分かる。声のトーンがマジ過ぎる。頷かないと大変なことになりそうな予感。

選択肢 Yes or yes 再び。

ガクガク頷いていると、前を歩くコウタが振り返る。

「なにになに？ 黙ってるって何を？」

「……盗み聞き……ドン引きです」

「いや、偶然聞こえただけで聞いてたわけじゃ……」

「そうですか。なら言い換えます」

コホンと喉の調子を整える。

「この変態」

「酷くなった!？」

コウタを見据える彼女の目——それは取るに足らない虫けらを見るようなクイーンズアイだった。

シンドウは背筋の悪寒に堪えながら話題の転換を図る。

「次は誰？」

「あ、ああ。シオだよ」

これ幸いとコウタも乗っかってくる。

「シオちゃんって……それって大丈夫なんですか？」

隣を歩くアリサが心配するのも無理はない。シンドウも、コミュニケーションが可能で人の形をしているといっても、アラガミである彼女の姿を人前に出すのはどうなのだろうと思う。

けれど、コウタはそれほど深刻でもなさそうに答えた。

「ああ。それは心配ないよ。シオのことは博士の知り合いの子ってことにしとくから」

「……本当に大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だって」

最後尾について来るソーマに「下手打ったらぶっ飛ばす」という  
感じで言われても、コウタは気楽に請け負ってこう告げる。

「それに俺等が出るのにシオだけ仲間外れは可哀相じゃん？」

その一言で皆が黙る。

言葉から察するに、シオにも映像を見せる気なのだろう。

あの無垢な少女に寂しい表情<sup>かお</sup>をさせるのは確かに忍びない。

「それもそうですね。仲間外れは可哀相ですもんね」

「だね。やるじゃんコウタ」

「任っかせといてよ」

コウタは、得意そうに胸を叩いてむせる。

その姿を呆れて見ていたアリサが、ふと思いついたように尋ねて  
くる。

「ところで、シオちゃんの他はどなたの所に？」

「サクヤさんだって」

「部隊メンバーのところは全部回るんですね」

「あと教官」

………ん？

ポツリと聞こえた呟きに、二人の足が止まる。

「……………コウタ」



「今…なんと？」

「うん？だから残りのターゲットはシオ、サクヤさん、ツバキさんの三人だよ。ほら、急がないと回れなくなるよ」

振り返ってそう告げるコウタ。シンドウとアリサは顔を見合わせ、それからコウタに向かって叫ぶ。

「ちょ、ツバキさん？聞いてねー！！！」

「言ってるや来なかったでしょ？」

「当たり前だよ！！！」

「貴方死にたいんですか？！！！」

冗談にしてもタチが悪い。

65年のロシアでの掃討作戦で、原子炉の爆発に巻き込まれて生還したというあの女傑に寝起きドッキリ？素直に死ねと言えばいいという話だ。

「ソーマも何とか言ってやれよ！」

シンドウが言うと、彼も怒り心頭という——感じでもなく、何故かふいっと顔を背けた。

疑問符を浮かべていると、コウタが頭の後ろで手を組みながら代わりに答える。

「だって、ツバキさんトコ行かないなら協力しないってソーマが言うからさあ」

「「はい?!」」

衝撃的な発言に耳を疑う二人。

「ソ、ソーママジでか！？お前あんな好みか！！女性の上官（年上）にしばかれない人だったの！？」

「シオちゃんはとうするんですか！？浮気なんて酷すぎます！」

「違う！コイツを諦めさせようと言ったんだ。浮気なんてしてねえ！……いや、シオともそういう間柄じゃねえから、浮気なんて言われる筋合いはない！」

コウタを指しながらソーマが抗弁するが、その慌てっぷりが言葉を嘘臭くさせる。若干口が滑ってるし。

まあ、真実はどうでも良いとして。

「私帰ります。死ぬなら貴方達だけで死んで下さい！！」

「僕も下りる！聞いてないよそんな話！！」

命惜しさに逃亡を図る二人の肩をむんずとコウタが掴もうとする。シンドウは捕まったが、アリサはそれをひらりと躲して優雅に歩いて行く。

「待ってよ。そりゃないって」

「それはこっちの台詞だろ。こんな詐欺まがいのことされてんだから」

「俺ら仲間だろ？笑って許してよ」

「こんなことする奴は仲間じゃありません」

肩に置かれた手を払いのけ、シンドウは足早にアリサを追おうとする。しかし、コウタはしつこく食い下がる。

「いいじゃん。いい目見させてやっただろ？その恩義に報いろよ」

そこでシンドウはちよつと唸る。確かにこの企画がなければアリ

サのパジャマは見られなかった。それを思うと不思議と付き合ってやってもいい気がする。

「……仕方ないな……ただ、アリサを説得できたらね」

落とし処を用意してやると、コウタはパツと表情を明るくした。

「マジ？分かった。アリサー！」

「……………何ですか？」

振り返った彼女の目は生ゴミを見るそれで、説得の困難さを予想させる。

しかし、コウタは怯まなかった。

「ホントに帰るの？」

「そう言っています。…何か問題でも？」

「問題はないんだけどさあ……………ただ……」

一旦言葉を切り、コウタはニヤリと笑う。

「もっかいドッキリ仕掛けるけど」

「なっ」

「いつがいいかなあ。二日後か三日後か、それとも一週間後かな。そのへんランダムだね。今回の寝顔はキレイなもんだったけど、次も大丈夫とは限らないよねー」

「さ、最っ低！脅す気ですか?! ドン引きです！」

詰め寄って来たアリサの剣幕に2、3歩後退りながら、それでもコウタは引き攣った笑みを浮かべて言う。

「さあ、よだれ垂らした顔晒されたくないや、一緒にきてもらおうか？」

脅しというか地味な嫌がらせだ。

「くうう！分かりましたよ。行けばいいんでしょう、行けば！！」

けれど、女子的には効果は抜群らしかった。今にもじだんだ踏みそうなくらい悔しそうにしている。

「シンドウもこれで文句ないよね」

「はあ…仕方ないなあ」

諦めて腹を括るしかないようだ。



「やあ。よく来たね」

夜更けにやって来た一行を人懐っこい笑顔で出迎えたペイラー・サカキは、いつもよりウキウキしているように見えた。本当にこういうことが好きらしい。

「順調かい？」

「もちろん！」

同じくノリノリなコウタがニカッと笑い返すのに、満足げに頷い

たサカキは、それからこちらを見た。

「悪いね。こんなことに付き合わせて」

若干すまなさそうに眉尻を下げるサカキに、アリサは膨れっ面で、シンドウは曖昧な笑みで返す。

「……有効性は認められますから」

「やってる内に楽しくなってきたんで大丈夫ですよ」

シンドウ的には無防備な美女達の部屋を訪ねられてむしろ役得である……などとはアリサの手前言えない。

サカキはその答えに満足げに頷く。

「そうかい？……ソーマ。君も手伝ってくれているんだね」

「……………」

黙したままのソーマから何かを感じ取ったのか、サカキは心から嬉しそうにニッコリと笑みを浮かべた。サカキはソーマの両親とは古くからの友人だったそうで、親交が途絶えた今もソーマを憎からず思っているようだ。

「それで博士。シオは？」

待ち切れなくなったらしいコウタが言うと、サカキも話が脱線したことに気づいたようだ。

「ああ、彼女なら奥でよく眠っているよ」

「よし突撃だ」

聞くが早い。早速コウタが足を向けると、サカキが「あっ…」と止めるような声を出した。珍しい行動に驚いて足を止めるシンドウ達に、彼はちよつと氣まずそうに目を逸らす。

「ああ…なんというか…君達には難しいかもしれないね」

彼の言う意味がわからず皆で首を傾げると、

「……まあ、行けば分かるさ」

サカキは肩を竦めて苦笑った。



難しい。

サカキがそう評した理由を今、我々は思い知らされている。

シオは情報通り部屋にいた。

最近リツカが作ってくれた白い服を着て、ベッドの上で小動物ライクに丸まってすやすや寢息を立てている。

それは企画上、こちらに都合のよい状況のはずなのだが、シンドウ達は二の足を踏んでいた。

それは何故か。

「(……ねえ…これ、起こすの?)」

言い出しっぺがそう言ってしまうことから察していただきたいと

ころだ。

肌の白さと衣服の意匠。そしてなにより、汚れを知らない純心無垢な寝顔。

子供の寝顔は天使と言うが、シオはまさに天使そのものだった。はつきり言って、起こしにくいことこの上ない。

「(……企画の主旨だとそうなるね)」

シンドウは淡泊に答えたが、今からこの天使を叩き起こすことになるコウタの良心の痛み方を思うと、何となく申し訳なく感じてしまった。

「(うー…何、この罪悪感……?)」

ぼやくコウタが足取り重くシオのもとに近づこうとした時、その肩を細い指がガシツ!と掴んだ。その際、メキメキツと嫌な音がしたのは気のせいかな?

「(うぎゃっ!?)」

悲鳴を上げたところを見ると、気のせいではないらしい。

悲鳴を上げるような力で掴まれたコウタは、涙目になって振り返る。

「(何すんの!?)」

コウタが咎めるが、彼の肩を握るアリサは全くそちらを見ずに言う。

「…起こすの少し待って下さい。せめて私がこの寝顔を十分写真に収めるまで…!!」

「は、はい！」

鬼々迫る形相の今のアリサを邪魔することは出来ず、コウタがサッと道を譲る。

そんな彼を笑うことはシンドウにはできない。

何故なら彼も壁際に退避していたからだ。

見ればソーマも2、3歩退いている。

障害を秒殺したアリサはもう止められない。

「……………うにゅ……………」

時折シオが口をモゴモゴ動かしたりすると、

「きゃー!! なにこのカワイイ生き物ヤバすぎ!!」

どこからか取り出したカメラでバシバシやっている女の子はパーストモード放っておいて、男三人は部屋の隅にしゃがみ込んで顔を突き合わせ、今後のことについて口を開く。

「どうすんの？」

「どうするって……………どうしょ？」

「俺にふるな」

ろくな意見がでない。アリサがあれだけ騒いでいるのだからと、声を潜めるのも止めた。

「とりあえず……………」



シンドウは言い差して、アリサとシオを見やる。

「今のアリサの邪魔したら殺される」

「『同感』」

彼女の熱狂ぶりは見えて異常だ。昔実在したという『アイドルオタク』という人種と今のアリサは同類だ。かなり引く。

「じゃあどうする？アリサが落ち着くまで待つ？」

「いや、いつになるか分かんないよあれ……」

コウタとシンドウが腕組みして唸っていると、ソーマがポツリと言った。

「あいつがあれだけ騒いでて起きねーんだ。後に回せばいいだろう」  
「それもそっか」

コウタが頷いて膝を叩く。

「よし！なら先にサクヤさんとツバキさんを済ませてこようぜ」

そんなふうにした話が決まり、狂乱状態のアリサを三人がかりで外に連れ出して、背後のドアが閉まる寸前。寝言だろうが、シンドウはシオが呟く声を聞いた。

「またね」

## ターゲット3 シオの場合（後書き）

いかがでしたか？ ホントギャグは難しいです……………。

## ターゲット4〜ツバキの場合（前書き）

走り書きみたいになってしまいました。あと二話で終わりますので、どうか最後までお付き合い下さい。

## ターゲット4ツバキの場合

サカキの苦笑に見送られてシンドウ達は部屋を出た。

「……………」

次の行き先について、誰も口を開かなかった。互いに視線を合わせて確認も取らない。脇目も振らず向かったのは、無論、サクヤの部屋である。

いくら何でも死地という名の鬼の<sup>ねぐら</sup>疇に行く心の準備は、まだ誰にも出来ていなかったからだ。

「しめしめ…まだ起きてないみたいだ」

ドアに耳を当てて言うコウタに、シンドウとアリサは渋い顔をする。

「うわっ。しめしめなんて実際に言う奴初めて見たよ」

「<sup>はた</sup>傍から見たら変態ですね。ドン引きです」

「言いたい放題言うなお前ら……」

頬を引き攣らせたコウタは気を取り直してドア横のスイッチに手を伸ばした。が。

「あれ？」

カチッと押してもドアが反応しないことに首を捻る。さらに何度かプッシュするものの、

「開かないね」

「そうだな」

「ついにドアにまで無視されるようになりましたか。ご愁傷様（笑）」

「んなわきゃねーだろ！」

コウタは取り出した通信機に不機嫌そうに話しかける。

「ちょっと博士。サクヤさんの部屋に入れないんだけど」

『うーん……ちょっと待ってくれるかい？』

そう言っ**て**しばし沈黙した通信機から返ってきたのは、あまりに**かんば**も芳しくない答えだった。

『やあすまない！どうやら“細工”の過程で不具合があったらしい。修正に少し時間がかかるから、サクヤ君は後回しにしてほしいんだが……』

全員で顔を見合わせる。皆、青ざめた顔を引き攣らせていた。

「……やっぱツバキさんはやめない？」

胃の中に感じる鉛の塊みたいな緊張で思わず口走った言葉に、すぐさまアリサが乗ってきた。

「そ、そうですよ。何もわざわざ死に行くことはありません！」

そして彼女はソーマに顔を向ける。

「ソーマさん！あなたの想いは尊重したいですが、今回は諦めまし

よう！何なら今度、私が責任を持ってツバキさんのシャワーシーン撮って来ますから」

「いらん！！」

「くっ！何て堅い決意。そうまでしてツバキさんの寝姿が見たいんですか？シャワーより？あなたは男としてどんなステージにいるんですか！」

「違う！あいつの所に行くかどうかなんざどうでも良いって言うてんだよ！」

トマトのように真っ赤な顔のソーマ。ファン必見のレア物だ。何とか写真に撮ってブロマイドに出来ないものか。後々売れる予感がある。

「……………何だ？」

「別に？」

「ならその携帯がフォトモードなのは何でだ？」

「……………別に？」

バシャッ！（シャッターを切る音）

ふざけんなよこせせつかくの金ヅル渡せるかー！！てな感じに取っ組み合う二人。

結局ソーマ勝利で戦いは幕を閉じ、写真データを消去されてしまった。

シンドウは端末を前にガックリとうなだれる——ふりをしてコウタを一瞥。

ウインクが返ってきたところを見ると、乱闘のドサクサ紛れにこっそり転送した写真データは届いたらしい。

心の中では自分同様ガッツポーズであろうコウタは素知らぬ顔で言う。

「……いやでも行くだけの価値はあるよ。あのツバキさんだぜ？絶対盛り上がるって！」

「それはそうかもですが、でも……」

「へー。アリサお前、仲間のために身体張れないんだ？そりゃそうだよな。やっぱ自分が可愛いもんな」

「ぐっ」

そう言われては返す言葉もないのか、アリサは低く呻いた。コウタは怪しげに笑う。

「ふふふ。心配すんなって。俺に作戦があるからさ」

「そいつは確実に失敗するからやめろ」

「自爆オチ確定だね」

「むしろ不安です」

「んだよチクショー！！絶対上手くいくから任せろよ」

自信満々な少年の笑顔に一抹の不安を覚えたのは、単にシンドウの気が弱いからではないだろう。

「じゃ、博士。俺らが戻るまでに頼むよ？」

『ああ、頑張ってるね』

声援を残して博士は通信を切った。

コウタは通信機をポケットにしまいながら言った。

「行こうぜ！ボヤボヤしてっと夜が明けちゃうよ」

先陣切って歩き出すコウタを放つとくわけにもいかず、三人は仕方なく彼を追った。



ターゲットの部屋には意外なほどあっさり入れた。

最低でも《アラガミ》用トラップくらいはあると踏んだがそれもない。

ツバキは侵入者を気配で察知しそうなので、《アラガミ》に奇襲をかける時と同じくらい気を遣い——息を止め、心臓の鼓動まで潜めるくらいのつもりで——入り込んだので、拍子抜けながらもほっとした。

あとはツバキを叩き起こしてドッキリであることを伝え、とつとと離脱するのみである。

「（待って。やはり変だと思います）」

「（何が？）」

ぬけぬけとそう返すコウタを暗闇の中でじろりとアリサが睨む。

「（首謀者である貴方がやるべきことを私がやっていることですよ）」

彼女が立つのは最前線、つまりツバキのベッドの側。その位置はツバキを起こすことを示している。部屋に忍び込んだ土壇場で無理矢理コウタに押し付けられたのだ。



その時の彼の言い分は、男に起こされるよりは怒りが小さいはずだということだった。それこそが彼曰く、作戦である。

あまり騒ぐとターゲットを起こしかないため、アリサも議論に消極的だったのも彼の弁を助けた要因だろう。

「(そもそも何故私が……)」

「(他に女の子いないじゃん。それにさっきも言ったけど、男がやるよりは安心だよ)」

「(……そうでしょうか？この人どっちにしる問答無用に襲ってきそうなんです)」

うつぶせで抱きしめたバカでかい枕に頬擦り状態で眠っているセクシーな寝相のツバキ——洒落っ気はないが、(着用者の問題で)色気はムンムンのタンクトップ姿——を見下ろし、表情を固くするアリサの手が震えている。ちよつと——いやかなり可哀相になったが、自分はやりたくないのも何も言わない。

「(……始めます……けど)」

胸に手を当てて自分を落ち着かせたらしいアリサが、不意に猜疑心に満ちた目でこちらを見る。

「(いざとなったら私を囹に逃げようなんて考えてないですよね?)」

「(まさか)」

今回役割のないコウタが苦笑とともに肩を竦める。……部屋のドアにもたれて。

アリサは猜疑心を強めた半眼で彼を見ていたが、次にシンドウに視線を移した。

「（…………）」

無言だが、潤んだ瞳が全てを物語っている。

あなたは大丈夫だよね、と。

だから、シンドウはそっと頷いた。自分はアリサを置いて逃げたりしない……そんな決意を胸に秘めて。

「（…………じゃ、じゃあ…………行きます！）」

嬉しそうにはにかんだのも束の間、アリサが真剣な面持ちでそう宣言した。

アリサはゆっくりと手に持った得物——ねこじゃらし——をツバキに近づける。

「「（ゴクリ）」」

ゆらゆら揺れるフワフワな先端を見つめて皆が唾を飲む。その小さな音でさえも騒音に思えて、神経を不快感に逆撫でる。

フワフワとツバキの顔の距離はいよいよ1センチ。

緊張感はうなぎ登りで、大気に全身を締め付けられているような息苦しさに囚われる。そんな時。

ピピピ、というアラーム音が室内に響き、

ムク、と。

唐突にツバキが身体を起こした。

「!?!?!?!」

全員が最早音にもならない悲鳴を上げる。予想外過ぎて誰も動けなかった。逃げ出す心構えをしていたコウタやシンドウもあまりのことに度肝を抜かれたのだ。

時間が停止したような空間で唯一動けるツバキが無言でのろのろと辺りを見回す。ボンヤリとした寝起き顔はいつもの彼女らしくなく隙だらけである。が、しかし、眉間の皺と細めた目がとても恐ろしい。

「……………」

やがてツバキは、目の前で腰を曲げた状態のアリサに注目する。後ろからでもアリサが冷汗をかいているのが丸分かりである。

「つ、ツバキさん……あの、これはですね」

至近距離のにらめっこに耐え切れなくなったらしいが、無表情なツバキの前では、アリサの言い訳も何だか虚しい。

「……………」

ツバキは何を言われても無言だった。ぼーとした顔でアリサの言葉を聞いている。

「…あの…ツバキさん？」

あまりに反応がないのを訝しんだのか、アリサがおずおずと問いかけた。その瞬間、

「わぷ?!?!」

アリサの短い悲鳴がして、それを見ていたシンドウ達は我が目を疑った。

一体何を思ったのか、ツバキがいきなりアリサを抱き寄せたのだ。

「うぷ…!ち、ちょ、あの!ツバキ…さ…!く、くるし…」

ツバキの豊かな胸に窒息しそうになってもがくアリサ。その、見  
てはいけない感じの光景に絶句しつつ、誰もがようやく気づく。

どうも彼女、寝ぼけているらしい。

「これはど、どうしたら…」

シンドウが戸惑っていると、後ろから「逃げるぞ」と言う声がする。

「コウタ!?でも、アリサが」

「あいつのことは諦めろ!もう手遅れだ!こら押すなソーマ!」

「ぐぐぐ、お、おのれコウタっ!やはり裏切りま——あ、ツバキ  
さん!スカートめくれちゃいます!ひゃっ!そ、そこ触っちゃあ  
んっ!」

何だか背後は振り向いてはならない感じになっているらしい。と、  
いうわけで。

「アリサ、ゴメン!」

「シンドウ、貴方ですか!？」

哀れな犠牲者の怨嗟の声を背中に受けながらシンドウは入り口で  
ごちゃごちゃやっている二人に合流する。

「ちっ! 割り込むな」

「なにもたまたましてんの!? 早く逃げよう!」

「分かってんなら押すなってば!」

そんな醜い争いをしていたバチが当たったか。不意に部屋の証明  
が点灯した。誰かの手でも当たったのかもしれない。

「「「……………」」」

男達の動きが止まる。

アリサの声は既に途絶えていた。

この時彼等は切に願っていた。  
どうか、どうか、まだ寝ぼけて…………

「——ほう。これは面白いシチュエーションだな」

……………いてくれれば、よかったのに。  
冷えた声を聞いて皆がそう思った。



「なるほどな」

ソファに優雅に腰かけたツバキが今日だけで何度も聞いた台詞を呟いた。もちろんシンドウ達は床に正座だ。

今は恒例の企画説明タイム中である。

そこに取っ掛かりを得たと思ったようでコウタがパッと救われたような顔になる。

「そ、そうなんですよ！これは皆のための取材なんですってば！！」  
「そうかそうか。ところでお前達」

彼女の手には、テーブルに置いてあった彼女愛用のクリップボード。そこに留めた書類をめくって、今まで見たこともないくらいにっこり笑顔を浮かべるツバキ。

穏やかで可愛らしいとさえ思える笑顔なのに、その印象とは真逆の感想を抱くのは何故だろう。

「今すぐ群れで動くウ、アジュラ四体潰してくるのと、ここで私に可愛がられるのと…さて、どっちがいい？」

この人はどうして他人への死刑判決を笑顔で下せるのだろう。どっちを選んでも、もれなくもう片方も味わわされること請け合いだ。拒否しても結果は同じだろう。

「そ、それは困るよ！！せめてサクヤさんが終わってからに……」

思わずというふうに正座から半立になるコウタに、ツバキがちらっと見やり目を細める。

「う、っ」と正座に戻るコウタを冷然と見下ろしてツバキが言っ

た。

「サクヤ？あいつの所へ行く気なのか？」

遅まきながら言われて気づく。

彼女の弟・雨宮リンドウと橘サクヤは恋人関係なのである。そんな、いずれは義妹いもつとになる女性が今から寝込みを襲われると分かっている、この身内に優しい鬼が自分達を見逃すか？

答えは否、である。

「どうなんだ？」

「「ハ、ハイッ！その通りです」」

（（（死んだ……！！）））

この瞬間、冗談なしで全員命を諦めた。

「……………」

すぐに制裁が来ることを覚悟したが、予想に反して、ツバキはしばし黙考していたかと思うと、

「お前達、説教は後回し——いや、なしにしてやろう」

いきなりそんなことを言い放った。

「い、いいんですか？」

思ってもみない幸運な申し出に半ば信じられない思いでシンドウが聞くと、彼女は何度も言わせるなという顔になる。

「私ならサクヤを叩き起こそうとは思わんからな。その勇気に免じてだ。何だ、不服か？」

「いえいえ滅相もないですハイ！」

ブンブン両手を振って言うのと、ツバキは軽く鼻を鳴らす。

「なら、とっとと出て行け。私もそろそろ仕事の準備にかかりたい」

「あ、あの…」

コウタがおそろおそろ挙手して言う。

「仕掛けられた人にはついて来てもらうのがルールなんで…ですけど駄目ですよね分かります」

アリサを超える極寒のクイーンズアイに射抜かれ、コウタは首を引っ込めた。

だがまあ、今回はむしろこちらがドキリとさせられたので、この結果は仕方ないだろう。

「よし、みんな撤収ー。速やかに出てくぞー」

コウタの号令でそそくさと、出来る限りそうは見えない早足で逃げ出そうとする四人。

「ああ。ちょっと待て」

呼び止められてビクツとなって振り返る彼等に、ツバキは不意に表情を緩めた。



「完成品。楽しみにしている」

そう言って、彼女はさっき自分だけに煎れたコーヒーを一口飲んだ。

## ターゲット4〜ツバキの場合（後書き）

やっぱりギャグって難しいです。

## ターゲット5／サクヤの場合（前書き）

ラストスパート頑張ります。

## ターゲット5 サクヤの場合

「——っぷはー！いやー、死ぬかと思ったよなホント」

缶ジュースをぐびぐび飲んで盛大に息を吐いたコウタは、そう言  
って脳天気 to 笑った。

「……もとはと言えば誰のせいですか」

「そんな怒んなよー。良いじゃん無事だったんだしさ」

コウタはよほど気をよくしているらしく、若干の殺意すら含むア  
リサの呟きにもびくともしない。

ちなみに、怒りを噛み殺す彼女とは違い、すでに状況を諦めたシ  
ンドウとソーマは、二人揃って溜め息を吐くばかりである。

現在の彼等は、俗にベテラン区画と呼ばれるフロアの休憩所にい  
た。

望外の幸運によって地獄の四丁目から生還できた方がいいが、その  
結果直面したさらなる難局について話し合うためである。

「……それで、これからどうするんだ？」

切り出したのはソーマだった。いつもは無愛想で言葉少なな彼だ  
が、この時ばかりは不安と困惑の入り混じった顔で仲間を窺ってい  
た。

「もち、サクヤさんトコに行くに決まってんじゃない」

悪戯小僧の顔で全くよどみなくコウタが答える。変わらない方針に辟易しつつシンドウは確認を取る。

「でもさ、ツバキさんの言い方からすると、なんかヤバ気な雰囲気だよ？」

そう。それが自分達を尻込みさせる原因である。

それは、予想外の一言に尽きた。

ぶっちゃけた話、この企画最大の障害はツバキだと誰もが思っていたので、それ以上があるということに考えが及ばなかったのだ。ましてやそれがサクヤだなどと、ツバキの証言でなければ普通信じないだろう。そして、そんなヤバい所に今から自分達は赴くのだ。故に彼の軽さは奇妙に映る。

コウタは困ったようにがしがし頭を掻いて答えた。

「そりゃ分かってるけどよ。だからって今更投げ出せねーだろ。明日には上映しなきゃならねーんだから。お前らだってここまでやってお蔵入りは嫌だろ？」

「……」

一同が口をつぐむのを見て、コウタは一度ジュースを飲んで続けた。

「そこで作戦なんだけどさ。ヤバいっぽいのは分かってんだから、全員で行くのはマズイと思うんだよね」

「……小数でことに当たるってことか？」

「そゆこと」

名案とばかりに胸を張るコウタ。しかし、それをアリサが遮る。

「それはいいですけど…一つ問題が」  
「問題？」

アリサの発言に他の三人が耳を傾ける。

「誰が行くのか、ということです」

彼女の言葉に全員黙り込む。ちくちくと肌を刺すような重苦しい緊張が満ちていく中、互いの腹の内を探るように仲間を見やる。

「……ここはやはり発案者が行くべきでは？」

「いやいや。今まで後ろで楽してた奴が行くべきでしょ」

「こういう時、先陣切ってくのが隊長だろ」

「ええっ、僕！？女の人の部屋なんだし、やっぱアリサが……」

「……さっき、私のこと見捨てておいてよく言えますね」

「……………行ってきます……」

そこを突かれては返す言葉もなく、殊勝にうなだれるシンドウだが、まさか一人で地獄に落ちるつもりはないので、道連れを作るため往生際悪く足掻く。

「じ、じゃあせめて、もう一人来てよ。僕だけじゃカメラ回してドツクリ仕掛けての二役は無理あるし」

「……お前、道連れ作る気だろ？」

モロバレだった。さすがソーマ。危険に聡い。

「ハハハ、嫌だナァ。そんなワケないじゃないですか？」

「…それでごまかせてるつもりなんですか？」

アリスまでもが物凄く冷めた目でこちらを見る。怪しまれないよう演技したのに通じない。女のカンって凄い。

「い…いや、でも必要なのはホントだからね？」

しどろもどろながらも主張を変えないシンドウの本気が伝わったのか、空き缶をゴミ箱にシュートしてコウタが言った。

「しゃーねー。コイツの言うことにも一理あるし…ここはジャンケンで決めるか！」

「これがコウタなら見捨てる場所ですが…仕方ないですね」

「……ちっ」

三者三様の反応を見せつつも、彼等は静かに集中力を――闘気を高めていく。

「ふっ…実は俺、ジャンケンには自信あるんだよね」

「おあいにくさま。私も子供の頃はその強さから、地元で『じゃんけんありちゃん』と呼ばれたものです」

「うわダッサぶべっ!？」

「ゴメンナサイイ。掛け声は『最初はグー』ですよねっていう、万国共通ルールの確認でした」

「ぐぐ…泣かしちゃう…って、うおお、ソーマ!? それは相手の手が読めるっつー伝説のポーズじゃん!!」

「それを知っているとは…やりますね」

「……必須技術だ」

「早くしなよ」

思わぬ盛り上がりを見せる三人を待ちかねてシンドウは催促する。  
決して仲間外れが嫌だったからではない。寂しくなんかないったら。

「……外野もお待ちかねみたいだ。ここから先は拳で語り合おうぜ」  
「「上等」」

やたらとカッコイイセリフとともに三人はゆらりと立ち上がると、  
片手で包んだ拳を腰溜めに構える。

ゴオツと彼等を中心に突風が吹き荒れた気がした。彼等の闘気が  
より高まって厚みを増し、背後にオーラが見える。

その勢いに<sup>お</sup>圧されて後退るシンドウ。

（やばい……ノリが前に見た7つのボールを集めるアニメみたいにな  
ってる!?!）

《ノウァ》より先に地球の危機が訪れていた。

「「ジャンケン……」」

激しく闘気をぶつけ合いながら、しかし、表面上は静かに三人が  
呟いた。

「「ポオンッ!」」

その後、13回にも及ぶ熾烈なる三つ巴の争いの末——うなだ  
れた少女が一人現れた。

「何でもっと早く……手を組まれたことに気づかなかったの、私……  
……!」



恨めしげに自分の右手のチョキを睨むアリサの肩を軽く叩いて慰める。

「いやあ、悪いねえ」

にやにや笑いのコウタを悔しそうに睨みつけた彼女は、渋々ソーマから受け取ったカメラを担いで問う。

「……それで、次は何を使って起こすんですか？」  
「これ」

彼が小道具入れから取り出して見せた物に、アリサがキュツと柳眉を逆立てる。

「ずいぶん大きなクラッカーですね？ 貴方の頭くらいあるじゃないですか」

「そ。紐引くとオーガテイルも気絶する爆音と砲弾みたいな紙吹雪の塊が出る」

「貴方、自分がやらないからってわざと怒られそうな物渡してるんじゃないませんか？」

「まさかまさか。最初からこれ使うつもりだったよ？」

「じゃあちよつとその袋の中見せて下さい」

「イヤンエツチ☆」

「ちよつと駄目だよアリサ！ ムカついたのは分かるけど、カメラで殴るのはまずいって！」

「じゃ、よろしく」

クラッカーを受け取り、暴れるアリサを宥めてドアの前に連れていく。

今度こそ、ドアが開いた。

ウェルカム、と。

得体の知れない魔物がガパッと大口開けたように錯覚したのは怯えのためか。

「……」

ゴクリと唾を飲む。

鬼が出るか蛇が出るか。一抹の不安が身体を緊張させる。

「……よし！」

恐怖を振り切り、魔窟への第一歩を踏み出そうとした——そんな時、ドッキリの看板を持った腕に何かがむにゅっと触れた。

「のわっ、アリサ!？」

見ると、アリサが腕を絡めてきていた。そうなると自然、シンドウの腕には自己主張の激しいまあるい爆弾が二つ、むぎゅう、と押し当てられている。……うわお。

「大きな声を出さないで下さい」

「ご、ごめん」

謝ってから理由を尋ねようとして、止めた。腕を伝う震えで彼女も不安なのだと思ったからである。それにちよつとだけ、指摘することでの感触を手放してしまうのが惜しいという思いが無きにしもあらず。

（えっ…てか、は、挟まってない？）

『何』が『どこ』にとは聞くまでもなからう。

やはりというか大きい。服の上から見るより随分大きく、そして予想を超える柔らかさだ。

（なんて弾力っ…！！）

アリサのミューティニアは下着を着けない代物なので、つまり、これはほとんど生の感触なのである。なんだこれ、たまんねえ。

不安などどこかに飛んでいってしまった。思考が焼き切れたせいだ。

（うわーうわーヤベーこんな幸せでいいんですか、神様ありがとー）

しかし、あえて苦言を呈さば、上着が長袖なのが死ぬほど残念でならない！！

「どうかしましたか？」

「生なまって惹かれる響きだよね」

「意味不明過ぎて引かれると思います」

怪訝そうに眉を顰めるアリサを曖昧に笑ってごまかし、若干ボンヤリとした頭でシンドウはサクヤの部屋に踏み込んだ。

この時、自分は心のどこかで大丈夫だとタカを括っていたのだ。それが甘い考えだったことを、彼はすぐに思い知ることになる。



中は常夜灯が点いておらず、ドアが閉まると部屋は真っ暗になったが、幸いにも備え付けの調度品の配置はどの部屋も同じなので、ある程度見当をつけて動くことができる。

慣らした目をよく凝らすと、ベッドの上にこんもりしたシルエットを見つけた。寝息も聞こえる。

「（始めましょう）」

「（あ…）」

ずっと腕から離れた感触を残念がる声が出てしまった。

「（何ですか？）」

「（あ、いや…カメラの使い方大丈夫？）」

「（ご心配なく。必要な操作はソーマさんに教えてもらいました）」

「（そう…じゃあ任せた）」

シンドウは未練を振り切るように行動に移る。

が、ここでトラブル。

手探りでベッドの方へ向かう途中、ガツンと柵に足をぶつけてしまったのだ。意外と大きな音がした。

「……っ!?！」

靴のお陰で痛みはないが、心臓が口から飛び出るところだった。

「（……………）」

息を飲んでサクヤを窺い、変化がないことを確認してほっと安堵

する。

「(何してるんですか?!)」

「(ごめーん!!)」

暗闇から聞こえて来た声に平謝りして、今度はそろそろ注意深く進む。

ようやくサクヤのもとにたどり着いたシンドウは、クラッカーを手にはアリスに問いかける。

「(アリス、撮れてる?)」

「(あっ、ちょっと待って下さい。ナイトスコープ的な機能があるそうなので……)」

ゴソゴソ準備を進めるアリスを待つこと数秒。

「(準備できま——)」

言い差して、アリスが黙った。

「(アリス……?)」

闇の向こうに問いかけるが、彼女は答えない。

「(アリス? ねえちょっと? アリスってば!!)」

あまり大声は出せないが、しつこく声をかける。しかし、返事はない。

（何だ…？）

原因不明のアクシデントに戸惑いを覚えたが、放っておくわけにもいかない。

「（そっち行くよ？）」

そう声をかけて移動しようとした時、闇の向こうから声がした。

「（――シ……シシシンドウ……）」

やっと確認できた少女の無事に胸を撫で下ろし、文句を言おうとして相手の声が震えていることに首を傾げる。

「う、ううう……」

「（えっ、ちよっ、大丈夫なの？ 具合悪い？）」

声を抑える余裕もないらしく、突如上擦った唸りを上げ始めたアリサに驚いていると、彼女はこう答えた。

「う、ううう……うし、ろ……」

「（え？ 何……）」

言葉の意味も考えず、何気なく背後を振り返ると、

目が、合った。



ほんの少し時間は戻って、待機組。

「おい、見たかソーマ!? シンドウめ、なんつー羨ましい……!」

握った拳をわなわなさせて嫉妬に駆られる隣の馬鹿<sup>コウタ</sup>。放っとくと余計に絡まれそうなので、ソーマは溜息混じりに応じる。

「……くだらねえ」

「いやいや! 何落ち着き払ってんだよ。お前アリサのあの胸、ちゃんと見たことあるか? あれを独り占めされて黙ってられるかよ!」  
「…喚くな。耳障りだうっとうしい」

予想通りのくだらなさに会話を続ける気にもならず、そう言っ  
て睨みつけてやると、ぶつくさ言いながらもコウタは黙った。

これでようやく静かになったと思った……その時である。

「うわっ」

「きゃっ」

突如としてドアの向こうから聞こえてきた、二人分の短い悲鳴と争うような激しい物音。

「!」

「えっ、何っ!? どうしたの?」

ソーマとコウタは反射的に踏み込もうとしたが、

「うおおお!?!ま、ま、まって、待つて!は、話を、話いいイイイ  
ぎゃああああっ!!」

「イヤアアア!?!やめてええええ!ひぎゅっ…う…い…っ…!」  
?.....」

いやいや無理無理。

人間があんな洒落にならない絶叫を上げてしまうようなホラー臭  
ぷんぷんの部屋に入れるわけがない。

音が聞こえなくなるまで約10秒。10秒間二つの命が果てる音  
を聞いていた二人は、身体のコまで凍りついていた。

「「……………」」

ふと隣を見ると、コウタが今にも泣きそうな顔でドアを見ていた。  
軽い気持ちで始めたことがこんな結果になった責任を感じているの  
かもしれない。

「くそっ」

やがて彼は意を決してドアに向かって行く。

「お、おい…!」

動き出したコウタはソーマが制止するのも聞かず、ドアの前に立  
っ。

「待つてろ。すぐ助けて……」

コウタがドアを開けようと手を伸ばした時、



スツと、ドアが人ひとりが半身になって入れる程度に開いた。

「お？」

間髪入れずその奥から伸びてきた白くて細い手が、コウタの胸倉をガツと掴む。

「うえ？」

その言葉を最後に、コウタはほとんど抵抗しないまま闇の中に引きずり込まれていった。

「……!？」

ソーマが見守る前でパタン…と、ドアが閉じる。

今度は、中からは何の音もしなかった。

「……………」

ソーマは無言だった。呆気に取られていた。今起きた一連の出来事に現実味がない。あまりに一瞬のことだったのだ。

「……………」

自然と身体がドアから距離を取るように、壁に背中をつける。近づけば自分もやられると勘が告げている。

ちらっと見やれば、自分の部屋との距離は数センチだ。

「……………」

ソーマがじりじりと壁を伝って動き出そうとした、ちょうどそのタイミングで、再びドアが開いた。

「……………」

ソーマは身体と表情を凍りつかせて、数センチだけ開いたドアを見ていた。

より正確には、廊下から差し込む光が照らしだした、ドアのすぐそばに力なく落ちている、手を（、、）。

嵌めているグローブからコウタのものだと分かった。

「……………」

助けなければ、と思うのに、身体がそちらへ行くことを拒否している。心を占める得体の知れないものへの恐怖に阻害され、指一本動かさないでいると、ピクリとコウタの手が動いた。

「コウ———」

安堵とともに一步近づいた時、彼は間違いに気づいた。

ズル：ズル：と、コウタの手がホラーな感じでドアの陰に引っ込んだからだ。その動きはどう見ても自発的なそれではない。

誰かがコウタの足を引っ張ったとしか思えなかった。

誰が、とは聞くまでもないだろう。

「……！！」

バツと身を翻して自室に転がり込む前に、

「……………ソーマ？」

闇の中から聞こえてきた眠たげで、馴れ親しんだ“彼女”の声。  
なのに、ソーマは自然と身体が強張るのを感じた。

戦場で幾度も感じた危険信号。

背後のドアの隙間から、ウロウ、オロスの複眼に覗き込まれているかのような不気味さと憚ましさを感じ、背筋にじっとりとした汗が浮く。

まさか《アナグラ》で《神機》が手元にないことに焦るとは思わなかった。

「あなたもなの？これは何の騒ぎ？」

静かな——もつといえは無感情な問いかけは、それゆえに、地獄の底から聞こえるような怖い声だった。背筋をなぞる視線が冷たいナイフに思えた。

「……」

ソーマは答えない。いや、答えられない。

これまで経験したことがない圧倒的な恐怖を前にすくんでしまったのだ。

「…答えて、くれないの…？」

問いかけに、ザワツと肌が粟立つ。すーっと音もなくドアが開くのが分かった。彼女が闇の奥から這い出て来るイメージに震撼した

ソーマは、引き攣る喉を必死で動かして制止する。

「待て！話すから早まらないでくれっ！」

恥も外聞もなく懇願するような声音になったが、この際気にしてはいられなかった。



「寝起きドッキリ…か。なるほどね。コウタと博士が考えそうなことだわ」

ソーマの話聞き終わると、起伏に乏しい声でサクヤは言った。背筋を撫でる殺意も霧散した。

理解を得られたことにソーマは背を向けたまま心底ほっとする。

「もしかして、私で最後かしら？」

尋ねる声はさっきよりしっかりしていて、どうやら目が覚めてきたようだった。

「……いや、まだシオがいる」

努めて平静な言葉を返すと、サクヤは「そう」と呟いていきなり黙り込んだかと思うと、

「私もついて行くんだよね？」

そんなことを言ってきた。

「い、いや…別にそんな義務はない…」

「何？」

「……何でもねえ」

「そう。すぐ準備するわね」

会話を終えようとするサクヤ。しかし、ソーマには聞くことがあった。

「…………おい」

「ん？」

「あいつらは？」

サクヤは答えなかった。振り返ると、ドアは閉まり切るところで、しかし、その奥で赤い線が凄惨に弧を描くのを彼は見た。

「……」

一人取り残されたソーマは、強張った肩から力を抜いた。知らず知らず握っていたらしい拳を開くと、じつとりと濡れていた。

《アラガミ》相手でもここまでの恐怖は感じまい。

額の汗を拭った時、サクヤの部屋の扉がスライドした。

「お前等……」

現れたのはシンドウ達だった。が、様子がおかしい。皆一様に俯いて、暗い雰囲気を引き連れていた。

「お、おい…？」

恐る恐る声をかけてみるが反応はない。そればかりか、奇妙な行動を取りはじめる。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

シンドウは、廊下の壁に頭を打ち付けながらぶつぶつ呟きを漏らし、

「……………」

コウタは、無言で何かを描くように床を指でなぞっているし、

「……………」

アリサは何やら母国語で呟きながら、その場に小さな円を描くようにぐるぐる歩き回っている。

そんな彼等の姿は正気を失った者のそれで、一体部屋の中で何があったのか、考えるのも恐ろしい。

「……………」

気まずいとかいう生易しい空気じゃない。ただそこにいるだけで何かに汚染されてしまいそうな空間が出来ていた。

ツバキの言ったことは事実だった。

橘サクヤ———本当のMS・アンタタッチャブルとは彼女のことだ。

「お待たせ。行きましようか」

サクヤが出てきたのは30分後だった。

「どうしたの？」

「……いや……」

言葉を濁して三人を見やるとサクヤはその視線を追って、ニッコリ笑った。

「何してるの（、、、、）？行きましようよ（、、、、）」

声を荒げたわけでもないのに、彼女の言葉は身体のコを震わせた。様子のおかしい三人はビクリと肩を揺らす。どう考えても逆効果な反応。

しかし、予想は呆気なく覆る。

三人がニコニコして立ち上がったからだ。

「遅いっすよサクヤさん」

「だから女の身嗜みは最低でもこれくらいはかかるんですよ」

「楽しみねシオの寝顔」

「一度行ってみましたけど、ちょっとおこせないくらい可愛かったですよ」

まるで何事もなかったかのように、不自然なまでに自然な様子で歩いていく四人の背中を、ソーマは慄然として見ていた。

## ターゲット5「サクヤの場合（後書き）」

楽しんでいただけたならよいのですが…。



### ターゲット3（再）くシオの場合（前書き）

下手で短い文章ですが、どうぞお楽しみください。

### ターゲット3（再）―シオの場合

再度訪れたサカキ博士の研究室にて。

「おお、戻ったかい。上手くやったようで何よりだ」

揃った面子にニヤニヤ笑いかけるサカキに、眠気が抜けてすでにいつも通りのサクヤが溜め息混じりに言う。

「……博士。全部貴方の差し金だそうですね」

「正確にはコウタ君と、だけどね。面白い試みだろう？」

「……聞けばツバキさんの所にも行ったとか。あの人は忙しいんですから、休んでいるところを邪魔するのはどうかと思います」

「いやー言葉もない。実は先程、ツバキ君からお小言をもらったんだ」

頭を掻くサカキに、手のかかる子供を見るような顔をするサクヤと、ここで、サカキが不思議そうにシンドウ達を見る。

「……随分と静かだね。どうしたんだい？」

「「「「……………」」」」」

ニツコリ笑って黙したままの三人と目を逸らす一人に疑問符を浮かべるサカキ。彼等の代わりに答えたのはサクヤである。

「ああ、ちよつときつく叱ってしまったんです。私寝起き悪いので…」

「「「「……………」」」」」

あれを『叱った』の一言で収めちゃいけないと思うが、怖くて言えない四人であつた。

「フム、そうかい？」

シンドウ達の表情になにやら引っかけりを覚えたようだったが、結局サカキは納得した。

「それでは諸君。最後の仕事だ。そろそろ彼女の起床時刻なので手早く頼むよ」



「……ムニャ…ウマ……ぞー……うにゅ…」

「キャー！何これカワイイー！！可愛すぎるうー！馬？象？どんなファンシーな夢見てるんですか！？いやーん、もう、シオちゃん大好きっ！」

「気持ちは分かるからアリサ落ち着いて。あれは多分『ウマイ』って言ってるんだ」

「いやでも実際見ると凶悪な可愛さね。本当に天使みたい。ね、ソーマ？」

「………知らん」↑（若干頬が赤い）

興奮のあまり皆、自然と声量が大きくなっていたが、この天使な《アラガミ》少女は枕元のやり取りにも気づかず、すやすやと健やかに眠っていた。

「………ところで、コウタはまだなの？」

準備があると言って少年が出て行ってから、もう10分は経っている。氣遣うサクヤの問いに、シオを間近で眺めてご機嫌なアリサがうわのそらで答えた。

「さあ？まあ来なくても問題はありませんが」  
「またそんなこと……」

シンドウがたしなめた時、

『うばぁーっ！！』

扉を開けて入って来たナニカが吠えた。

「「「「！！」」」」

驚きとともに皆がそちらを見る。

「《アラガミ》！？」

咄嗟にそう叫んだが、間違いない。

額から突き出す二本角。血走る目玉に耳まで裂けた口から覗く牙。そんな恐ろしい作りの顔は真っ赤で、まるで怒り狂っているかのよう。

枯れた植物を服のように身に纏い、極めつけに右手に肉切り包丁を握って、今からお前らを料理しますと言わんばかりのそいつ。

こんな生物が《アラガミ》でないわけがない。

「あら？」

さすがのサクヤも、この不意打ちに状況を把握できずにいるようで、間の抜けた声を出していた。

「ちいっ」

真っ先に動いたのはソーマ。振り向きざま相手の顔面にハイキックを喰らわせた。

『うべ！？』

変な悲鳴を上げてたたらを踏むそいつの腹に、

「ふっ！」

シンドウの拳が食い込む。腰の乗った良いのが入った。

『ぐふッ！』

がっくりと膝をつく怪物。

その隙にシンドウが指示を出す。

「今だアリサ！シオを！」

「はい！…あっ！？」

起きないシオを抱えて駆け出そうとしたアリサだが、痙攣していた《アラガミ》がゆっくりと起き上がるのを見て立ち止まる。

「クソッ！やっぱ神機なしじゃ無理か！」

齒噛みするシンドウ。そんな彼の前に、ソーマが庇うように立ち  
はだかる。

「シンドウ！お前は三人を守れ。こいつは俺が引き付ける」

「無茶だソーマ！僕も手伝う」

「馬鹿が！テメーと俺じゃ違うだろうが！」

部屋の奥に退避し、女性三人を背に言い合っている間に、敵はの  
つしりと立ち上がっていた。

（どうやって《アナグラ》に！？）

相手の恐ろしい形相を睨みながらシンドウは考える。

いくら《アラガミ》が何でもありだと言っても、誰にも気づかれ  
ないでこんな奥まで来れるわけがない。シオのような例は内部の手  
引きがあればこそなのである。

（まさか支部長が？）

内心の焦りに押されて考えを巡らせるが、しかし彼は今支部にい  
ない。切り捨てられる動機になることは、何一つバレてはいないは  
ずだ。

ならば…と思いかけて止める。

今は目の前の敵に対処すべきだ。

「せめて博士が応援を呼んでくれれば」

「……よく考えろ。こいつはどこから入って来た？」

「あ……」

アリサの悲痛な声がする。現実が胸に突き刺さり、シンドウも顔を歪めるが、もはやどうしようもないことだ。

（クソッ！さっきまでのギャグパートはどこいったんだ？！）

「あー…ちよっと皆？」

サクヤがおずおずと何か言おうとしたのを遮るように、

『うう…』

《アラガミ》が微かに唸りながら一步一步近づいてくる。  
隣でソーマが舌打ちする。

「シンドウ、サクヤ。俺達で時間を稼ぐぞ。アリサ。シオを叩き起こせ」

ソーマの指示は的確だ。今ある戦力で《アラガミ》に有効打を与えられるのはシオだけなのだから。

ただ問題は、当の本人が眠り姫であることだ。

「シオちゃん起きて！」

「ん…」

アリサの必死の呼びかけがシオに届くには、まだまだ時間がかかりそうだ。

「…っ、ソーマ！サクヤさん！無理はするなよ」

「テメーもな」

「いや、あの…」

まだ何か言いたそうなサクヤは放って置いて、シンドウは身構える。

素手でどこまでやれるかは分からないが、リーダーとして最低でも仲間が生き残る時間くらい稼ごうと、拳を固めて相手を睨む。と、そこで予想外のことが起きた。

『な、何すんだよ!』

目の前の《アラガミ》が、喋ったのだ。

「「!?!」」

驚くこちらをよそに、そいつは不意に頭部を両側から押さえた。何を、と思う間もなく、かぱっと大きな頭が外れ、見知った顔が現れた。

「こ、コウタ?!」

驚くアリサに、腹を押さえて顔色の悪いコウタが頷く。

「そうだよ!?!何なんだよ皆してボコリやがって!ちょっと驚かそうとしただけじゃん!」

涙目で訴える彼を前に呆然としていたシンドウは、ふと気づいてサクヤを見やる。彼女はやれやれとでも言いたげに額に、手を当て頭を振っていた。

「サクヤさん、これってどういう…?」

「あー、うん…コウタのそれね、“なまはげ”って言って、この国



の地方の風習で使われてた衣装なの。……まあ、このご時世じゃ間違えるのも無理ないわね」

サクヤは困ったような笑みを漏らす。

その笑顔が全てを雄弁に語っている気がした。

つまり、これは、あれなのだろう。

「「……………」」

皆の口から自然と溜め息が漏れた。

このやり場のない熱をどう処理すべきか。

「「……………」」

「…あれ？皆？」

様子がおかしいことに気づいたらしいコウタが若干後退る。が、遅い。

「…………あんまりやり過ぎないようにね」

この場で一番理性的なサクヤのお墨付きをもらい、ぐわっとシンドウ達の目が怒りに燃え上がる。

「「紛らわしいことするなー！！」」

「いぎゃああああ！？」

取り越し苦労の怒りを込めて、馬鹿をその場で袋だたきにする。そんな騒ぎの最中でも、シオはとてもよく眠っていた。



「——イデデ……ひでー目に遭った……。ここまでやるか、フツ——？」

ボロボロのコウタが非難がましい目を向けてくる。しかし、シンドウ達は動じない。むしろ威圧するように目を細める。

「まだ反省が足りない？」

「なら次はもっと強く叩きましょう。上手くいけば馬鹿が治るかもしれない」

「……ゴキ！バキッ！（指を鳴らす音）」

「反省してまずごめんなさいだからそんな怖い顔やめて」

さっきの暴力がよほど堪えたらしく、ガタガタ震えて訴えるコウタ。

そんな彼の様子にフン、と鼻を鳴らし、アリサは告げる。

「それより、本当にそのおかしな格好でやる気ですか？」

「おかしなって……日本人の文化ウチらなんスけど」

「そういうことではなく、」

アリサはコウタが両手で抱えるデカイ顔を見て——その迫力にすぐに目を逸らして——心配そうに言う。

「シオちゃん、泣いちゃうんじゃないですか？」

自分達ですらさっきの騒ぎである。寝起きの子供に見せていいも

のなのか。判断に迷うところだ。

「泣かれんのは困るなあ」

コウタはうーんと腕を組んで唸っていたが、やがてぽんと手を叩く。

そしてゴソゴソと懷を漁りつつこちらに背を向けて座り込んだ。彼の手元でなにやらキュッキュツと擦るような音がする。

しばしの間、試すがめつしているコウタを前に首を傾げていると、

「よし！」

そう言ったかと思うと、コウタが仮面を被り、こちらを向く。

『どーよ？』

「「「ブハッ!?」」」

シンドウ、サクヤ、アリサの三名は思わず吹いた。ソーマはぎりぎり顔を背けたが、肩の震えは隠せていなかった。というか、笑わずにいられようかというものだ。

こつちを向いた馬鹿でかい顔面は、数種類のマジックペンで子供の悪戯のような滑稽な化粧が施されていた。

基が彫りの深い恐ろしげな物だったがために、ケバいい化粧の生み出す破壊力はもはや計測不能。

タイトルは多分、『オネエ系の赤鬼』だ。

「ふはははははは！！？な、なに…ナニそれ…ぶふっ！」

「ちょ、ちょっと！こつち見ないでお願い！コウタにしては…あり

えない面白さなんですけど……ふふっ……！」

「こんなに笑ったの、いつぷっ……ふっ……いつぶりかしら」

腹もよじれんばかりに笑う彼等を見て、コウタは満足げである。

『これなら平気だろ』

「うん、も……文句なしだよマジで……！」

むしろ違う意味でシオの身が心配だ。笑い死にしなければいいが。

『ソーマ、カメラよろしくねーん（ハート）』

「……もう分かったから……早く、やれ……」

笑いを堪え、震えて上擦る声でソーマが言うと、『は……い』とコウタは、えらくしなっばい所作を取ってシオに向かう。わざとらしく尻を振る後ろ姿がまた笑いを誘う。

こういうことに関しては、本当に天才的な男である。

『画面の向こうのみんな！今日は最後に、特別ゲストとして博士の親戚の女の子（超可愛い）にもドッキリを仕掛けるぜ！天使の寝顔に腰抜かすなよ』

カメラに向かってそうのたまうと、コウタはシオを起こしにかかる。

『おい。起きろー』

「んん……！」

肩を掴んで揺さぶるコウタ。シオが煩わしげに唸って腕を振ると、

小さな拳が彼の額にコツンと当たった。

ここで一つ思い出してほしいのだが、彼女は《アラガミ》である。華奢な見た目によらず、厚い壁をぶち抜いた実績もある。

つまり、何が言いたいのかというと、

『ギャアア!!』

コウタが弾き飛ばされて宙を舞った。のけ反った身体がぐるりと縦に回転して飛ぶ。

ドカン!と豪快な音を立てて壁にぶつかり、ずるずると滑り落ちてくる。

「コウタ!？」

『へ…へ…油断しちゃったい…』

コウタはよろよろ立ち上がり、再度チャレンジ。

『お、おーいシオ…』

「うにゅ…!」

『ぶべらあっ!?!』

またも殴られゴロンゴロン転がったコウタは、それでもめげずに立ち向かう。

『しぶごおっ!?!』

すぐさま殴られて悶えるコウタ。

さっきはあれだけ笑えた鬼の面もボコボコで、もはや笑えるもの

ではなくなっている。

しかし、そんな彼の努力が実を結んだのか、

「…ん…んう？」

睫を震わせてシオが目を覚ます。手の隙間からキラリ、と仮面の奥でコウタの瞳が輝いたのが見えた。

『うばあああああ！！』

コウタが吠えながら覆いかぶさる勢いで詰め寄る。

さあどうなるかと緊張する皆をよそに、シオは静かなものだった。

「……………」

寝ぼけたようでもなく、目をぱちくりさせて不思議そうな顔でコウタinナマハゲを見つめている。

『…………あれ？』

あてが外れたというように固まるコウタ。そんな彼からこちらに目線に移したシオが、何かに得心したようにパンツと両手を合わせる。

「そっか！これはあれだな。イタダキマスだな！」

「「へ？」」「」

彼女の発言に今度はこちらがキョトンとなる。

その間にシオは可愛いお口をいっぱいに開けて、

「イタダキマス！」

ガブツ！とかじりつく音がやけに軽快に響いた。

『ぎいやああああ！？食われるうー！』

頭に食いつかれ、割りと必死なコウタの悲鳴で我に返り、慌ててシンドウ達が止めに入る。

「シオ！それは食べちゃ駄目だ。美味くないから」

「そうだよシオちゃん！馬鹿を食べたらお腹壊しちゃうから！」

「それどころか馬鹿になるぞ」

「……？あつ、《アラガミ》は捕食した物の形質を取り入れるから……上手いわね」

『デメーら覚えてろよ！！』

散々な言われようと食される恐怖に半泣きのコウタの悲鳴とともに、波乱のロケは終了したのだった。

### ターゲット3（再）（シオの場合（後書き））

いかがでしたでしょうか？あと一話、エピソード的なものを書くので、最後だと思ってお付き合いください。サクヤさん編が思ったように書けなかったので、今回は上手くやれてるとよいのですが……。



## 事後報告（前書き）

これで終わりです。

ノープランでいたずらに一話増やしちゃって、ちよつと後悔しています。読者の皆様すみませんでした。

大した内容ではないので過度な期待は禁物です。

## 事後報告

第一訓練場を借り切って執り行われることになった上映会は、告知があので味を通り越して紙の無駄遣いとさえ言えるポスターだけだったにも関わらず、驚くほど客入りが良かった。

あまりの多さに一度には入り切らず、当初1回だった上映を急遽3回に増やしたと言うから相当である。

けれど、シンドウ達第一部隊の面々は今回の最大の功労者ということで、一回目の上映に限り、優先的に席を用意して貰えた。ズルをしたようで悪い気もしたが、見たいのが本音なのでありがたく甘えることにした。

シオは一緒に見られないことをしきりに残念がっていたが、その辺りはサカキがうまく相手をしてくれるだろう。

百単位の人間が一所ところに集ったために起きたざわめきは、上映開始のアナウンスとともに場内の照明が弱まるのに合わせてしぼんでいった。

期待に満ちた空気で静まり返る場内。皆の注意が稼動を始めた巨大なモニターに向く。

ロケ直前に撮られたらしいコウタによる企画の主旨説明の後、本編が始まった。内容と客の反応をちよっぴり述べると、

実はこっそり撮影していたらしいソーマへのドッキリ——寝ている彼にパーティーグッズの鼻眼鏡（ビン底ヒゲ付き）をかける——が流れて爆笑したり（この一件がソーマと皆のわだかまりを取り除くきっかけになったのは間違いない）。

シンドウがコウタに説得される一部始終が流れて、赤面したアリサに「どん引きです」と言われたり（あの日、彼が身に着けていたペンダントに予備のカメラが仕込まれていて、ロケの一部始終を記録していたらしい。後日、ソーマとふたりでコウタを袋だたきにした）。

アリサとツバキのキュート&セクシーな寝姿に男性陣が総立ちになって、女性陣に白い目を向けられたり（いやマジでお宝映像だった）。

髪に修正が入り、艶やかでサラサラな白髪のアリス・シオの寝顔に皆でうっとりしたり（その時リツカが意味ありげにこちらを見たが、気づかないフリをした）。

サクヤによる暗闇の惨劇に目と耳を塞いだり（横倒しのほの暗い画面と流れてくる音声の恐怖は筆舌に尽くし難い）。

終始笑い声とともに上映会はつつがなく進んでいった。

上映終了後、この動画のディスクへの焼き付け及びターミナルでの閲覧許可を求める声が上がリ、それは当然のように許可された。日々順調に視聴回数を伸ばしているそうだ。

この世界はいつだって我が儘で、

理不尽な選択を迫り、

それが、現実として連綿と続いていく。

住む場所を、思い出を、大切な人を、この世界は容赦なく僕達から奪い去り、それでも足りぬと犠牲を強い続ける。  
地獄のような、救いのない現実。

でも、そんなに悪いことばかりでもないのかもしれない。

こうして皆が笑顔になれる、そんな瞬間があるのなら。

これから先どんな悲しみがあろうとも、きっと乗り越えていけるだろう。



ちなみに。

第一回が大好評だったことに味を占めたコウタとサカキ、欲望に駆られた男数名（当人達のプライバシー保護のため、名前は伏せる）が、早速第二回の実施を画策するも、関係者を締め上げて情報を得た女性陣の強襲を受け断念したそうだ。

医務室のベッドの上で彼等は口を揃えていったそうだ。

あそこでカノン（戦闘モード）を持ち出しちゃ駄目だろう、と。



しゅーっりょー!!

書き切ったー!

イヤフウーーう!!

……ゴホン!

お見苦しいものをお見せしました。

改めまして、ども。数え唄です!

勢い余ってこの文章をご覧になられた方は何事かとお思いでしょうが、あとがきのものなので本編には関係ありません。読まなくても大丈夫です。でもできれば読んでほしい。

『ゴッドイーター』の二次創作を思いつきで書き始めて早二ヶ月。本当は一ヶ月で済ますつもりだったのに、思いのほか時間がかかってしまいました。

しかし、途中で投げ出さず最後まで書き上げられたのは、皆様の応援があってこそです。

この場を借りて篤く御礼申し上げます。

つきましては今回、前々からやってみたかった企画を思い切ってやっっておもうと思います。

祝☆初書き上げ記念! 登場人物とトークしちやおう!!

というわけで、ウチの子・シンドウ君に来てもらっています! どう

ぞ！

「えー…どうも。柏木シンドウです。隊長やってます。はあ……」

ちよつとちよつと！のっけからテンション低いよ？もちつと気合いの入った挨拶しようよ！

「そんなこと言われてもなあ…。本編終わったばかりで疲れてるんだよ。正直寝てたい」

くうう…！！ちよつとは作者に協力しようって気がないもんかねこの人は！

いいよいいよ！こんなこともあろうかと、もう一人呼んであるから。

「何？まだいるの？さっさと出しときなよ」

では登場していただきましょう！

「何でもいいから早く終わらせよう。こんな企画、読者はなんの期待もしてないよ」

シンドウの妹ちゃんです！

「ガホッ！？待った待って待てちよつと待てその紹介っ！」

何よ突然。眠気覚めた？

「おかげさまでもうバッチリですっ！そんなことより今の何！？妹っ？！そんな設定初耳なんですがつ！？」

正確には義妹だけど。

「どーでもいいわそんなことっ!! まず説明を! 衝撃の妹設定についての説明をしてください!!」

動揺してんなあ旦那。しかし、こいつは聞くと涙、語るも涙の物語……。

「もういい! まともに説明する気がないのは分かったから、せめてどんな娘なのかくらい事前に教えてよ。これじゃ心の準備のしようがない…」

「こんな娘ですが」

「!?!」

!?!

「どうも。ただ今ご紹介に与りました話題の妹ちゃんこと、蕪木ユウです。いかがです、お気に召しましたか兄上? (ムスツ)」

「ど、どうも柏木シンドウです (汗)」

いやー、会えてよかったね。

「(ちょーしかめっつらなんだけど?! よかったって雰囲気じゃないでしょ)」

ユウはシリアスストーリーな次回作の主役ですので、それにピッタリな大変真面目なキャラになってんの。ね?

「私…必要性があれば脱ぎます」

「真面目かあれっ!？」

ばっ…あれはほら、お茶目だよ。女の子らしいジョークってやつですよ。ね？

「服は最悪、絆創膏バンソウコウが三枚あればOK」

なわけあるかつ!出来る前から次回作発禁にする気かお前は!!

「そんなふしだらな真似、おにーちゃん許しませんよ!」

「大丈夫ですよ。私、脱いだらスゴイですから。絶対に損はさせません」

そういう問題じゃねー!ー!ー!!

「数え唄!ー!ー!」

あつれー?何でこんな明け透けな性格になったんだ?イメージだと清純乙女だったはずなのに…。

「今年の私はエロかつこよさを目指してます」

お願いだから黙ってくれ。

「ええと、それで…ユウ…ちゃん?」



「ユウでいいですよん、お兄ちゃん」

「……ユウ、君はここへ何をしに？」

「決まってんじゃないん？呼ばれたからだよ兄貴」

「もうこの際エロかつこよくていいから、せめてキャラを固定しよう義妹よ」

「兄上は冗談が通じませんね。つまらない男<sup>ボソツ</sup>」

「ボソツて付けければ隠せると思うなよ」

あゝはいはい、兄妹ゲンカは後々。それよりほら、ユウ、決意表明なんかやっちゃいなよ。

「そーですねー…。私、蕪木ユウは、次回作終了までに、アリサを口説き落としてみせます！」

何を口走つとるかー！ー！ー！！

「良いじゃないですか。読者の皆さんもきつとこのルートを望みますよ」

「いやいや、冷静になろうよユウ。君は女の子でアリサも女の子でしょ？駄目だよそういうの！」

「おおっと兄上、そいつは全世界百合同盟に喧嘩を売ってると見做しているんですね？」

「何で！？僕は義妹を正常な道に戻そうと……て、世界！？」

「でも兄上だって、可愛い女の子が絡み合うシーンに興味はあるでしょう？」

「ないと言わない」

揺らぐなシンドウー！！！！ここでお前が揺らいで、作者だけでコイツを抑えるとか無理だから！

「そして一話につきワンシャワーシーンをお約束します。ご希望のキャラを明記の上、作者宛てにご応募下さい」

困るので止めて下さい。あと真面目な話を書くつもりなんでノーシャワーだからね。

「はあっ！？」

何でキレてんの！？

「あなたは自分が何を言ってるのか分かってますか、数え唄！シャワーですよ？ノークロスつまり真っ裸まっぱっ！！

私達の裸体の描写が、執筆という大義名分のもと誰憚はばることなくできるんですよ？ついでに言うなら、あなたの頭の中で裸の私達にこんなことやこんなことさせたって、誰からも後ろ指さされないんです！！」

マジで黙れーーーーーっっっ！！（作者絶叫）

真剣な顔でなんっ！発言しちゃってんのっ？もーやだもおおお

お！！

「お、落ち着こう数え唄？このままじゃ収拾つかなくなるよ」

どうせもう手遅れだよ。コイツの相手すんのヤダ。R指定寸前じやん。(イジイジ)

「ユ、ユウ。そろそろ次回作の予告を…」

「胸の大きさとお尻の形には特に自信があります」

「会話のキャッチボール大暴投！？てか、アリサの半分もあるように見えないんだけど？」

「…………兄上は知らないでしょうが、アリサは私と同じで着痩せをします」

「馬鹿な！？あの格好でどうやったら着痩せなんて真似が…！？」

「一緒にシャワー浴びたりするので見る機会は割りと多いのです。間違いないありません。脱いだら一回り大きくなるんですあの子。そこでお聞きますが、アリサの半分程度で着痩せする私は、ナイスバディだと思いますか？思わないなら仕方ないので脱いで見せてあげます」

「すみませんでした。ユウさんのナイスバディにお兄ちゃん、悩殺されそうです」

「分かればいいのです。…………では、そろそろ飽きたので私はこれで（悠然と歩き去るユウ）」

「強烈キャラだったね。あれが僕の妹かぁ」

…………結局、まともに次回予告出来なかったな。というか、このままあの変態を主人公に据えていいんだろうか。  
娘の気持ちがいらない父親の気持ちがいかなかったよ……。

「前途多難だね。頑張りなよ。……それじゃ、僕も行くから。今日は割りと楽しかったよ（手を上げて去って行くシンドウ）」

……………。

そ、そんなわけで！次はバーストのストーリーに沿った物語を書いてみます。

興味がある方は読んでみてくださいね！

## 事後報告（後書き）

ご愛読、ありがとうございました。

改めて、ユウがいろいろと心配になるラストでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4412o/>

---

ゴッドイーター（勝手に）番外編

2011年7月10日12時44分発行